

図書館だより

名古屋経済大学 図書館
名古屋経済大学短期大学部

2011.11 Vol.62

Every extension of knowledge arises from making the conscious the unconscious.

Library News

Our business in this world is not to succeed, but to continue to fail in good spirits.

Library News Library News

Library News Library News

contents

目次

特集

貴重本紹介

貴重本紹介シリーズ 14

ローマ法大全

Corpus Juris Civilis Romani



ユスティニアヌス帝は、529年から534年にかけて、トリボニアヌスを長とした10人の法律家を指名して、極めて雑多であった古代ローマの法律を整備させました。その結果、法学の入門書にあたる『法学提要』(Institutiones)、ローマ法の最重要部となる『学説彙纂』(Digesta)、ハドリアヌス帝(在位117~138)からユスティニアヌス帝までの勅法を集成した『勅法彙纂』(Codex Item)の3法典が編纂され、それにユスティニアヌス自身が発令した『新勅法』(Novellae)を加えて『ローマ法大全』と呼ばれています。

この四つの法典は、西ヨーロッパではあまり研究されませんでした。1090年、世界最古の大学ボローニャでローマ法註釈学という研究方法を確立し、法学の創造者と呼ばれているイルネリウス(1050~1130)や、イタリア各地で法律学を教え、ローマ法の復興者と呼ばれたチーノ・ダ・ピストイア(1265~1336)などが出ました。ボローニャ大学を中心にヨーロッパ各地でローマ法の註釈や解釈や要約が行われ、また印刷術の発達にも助けられ、膨大な数の流布本が出版されるようになりました。

さて、本学の所蔵本は1781年に出版されたものなので、『ローマ法大全』としては比較的新しいものだと推測されます。本の扉(左上の写真)のラテン文によれば、ユスティニアヌスが制定した勅法に*レオ(ン)6世(在位881~912)を初めとして幾人かの皇帝たちの発布した勅法を加え、ローマ12表法の再構成やユスティニアヌス帝以後の法理学を加えたものであり、さらに四編を一つに編集して『ローマ法大全』と名付けたと言われるゴドフロワ(1549~1623)の他、モディウス(1556~1597)やレーウエン(1626~1682)などの法学者の名も連ねられています。出版所は「ケルン」と伝えられていますが、扉には「Colonia Munatiana」とラテン名で記されていますので、スイスのバーゼル(Basel)ではないかと推測しています。

※レオ6世:原文は「LEONIS ET ALIORUM IMPERATORUM NOVELLAE(レオとその他の皇帝の勅法)」とあるので、この大全と関係の深い「レオ皇帝」にはレオ3世(在位717~741)も含まれているでしょう。

随想 2

「人の道」と「カネと権力」

法学部教授 新美 治一

国内外の図書館 3

経済学部講師 田村 善弘

読書ガイド 4

法学部教授 樋口 徹

経済学部講師 水野 有香

経営学部教授 高松 和宣

短期大学部准教授 家接 哲次

学生コーナー 6

経済学部 大澤 清

短期大学部 中島 梨紗

法学部 堀部愛美亜

人間生活科学部 宮浦 郁奈

図書館からのお知らせ 8



経済学部教授
宮川 昇



随
想



「人の道」と「カネと権力」



法学部 教授 新美 治一

福島第1原子力発電所の事故は、史上最悪といわれてきたチェルノブイリの事故をはるかに超える規模であることが次第にわかってきている。これ以降、事故はどのように収束していくのか、どのくらいの時間が必要なのか、再び豊饒な・みどりゆたかであった福島の地に人が生活できるようになるのか、思いは乱れる。

事故は絶対に許せない。事故に責任ある人々と機関・団体が、どのような形で償いをするのか、しかと見届けたい。福島原発事故は、「原発」にむらがり「カネと権力」を掌中に収めた人々がもたらした人災である。日常生活であれば「見苦しい」という評価に普通の人は耐えられない。しかし、福島原子力発電所の事故は、それをはるかに超える違う次元の「もっと酷い、醜悪な」諸関係に属する人々によって「ひき起こされた事故」である。「原発利益共同体(原発ムラともいう)」に帰属する人々の下卑た顔を想像することも厭われる。

原子力発電所を設置するには・時の政府の許可が必要である、立地自治体・地元の合意が必要である、必要経費と利益を合わせた電気料金の設定には国会の承認が求められる、原子力発電所は国の定期検査を受けなければ継続して運転することはできない、膨大な核燃料廃棄物を「処理」するためには国の計画に基づきこれを取りあえず処理する場合(青森県六ヶ所村)が建設され・これが維持される必要がある、……。<原子力の平和利用>の名のもとに、核に対する恐怖心と憎しみを持つ多くの国民を納得させ、これらの諸問題が首尾よく処理され、原子力発電が我が国で普及したのはなぜか？

「原発利益共同体」を構成する人々や機関・団体がおこなってきた・原子力発電を普通の「電力発電」にするために画策された所業が次々と暴露されている。原子力発電の導入に際しては、湯川秀樹をはじめとする当時の原子力委員会が「時期尚早」と反対しているにもかかわらず・アメリカと日本のごく一部の政治家の結託により強行される。朝日新聞をはじめとする全国紙を「札束」で買収し・原子力発電の安全神話をゼロから編み出し・流布させる、未熟な技術のために頻発する事故はこれらが隠べいされる、福島原子力発電所の設置の際にはアメリカの原子力発電炉メーカーGEの計画通りに<竜巻対策はあるが津波対策はない>原子力発電所が建設される、原子力発電を推進する通産省(現経済産業省)のなかに原子力発電所を「規制する」原子力安全・保安院が設置され・「規制」が骨抜きにされる、原子力発電所の新規増設または定期点検で停止している原発の再稼働に必要な地元の合意を「得る」ために、国又は県が主催する「地元の方々の意見を聞く会」を電源3法で黙らせ・「やらせ」が組織され「建設又は再稼働」が正当化される、経済産業省は電力会社からの出向

を受入れる・電力会社は主要官庁の退職したキャリアを受入れ官庁とのパイプを確立し・確実なものにしておく。進行する事故の事実の前に次々と「事故の楽観論」が否定され・メルトダウンという最悪の事態であるにもかかわらず、原発利益共同体の「学者」たちは福島原子力発電所の事故の「解説」を担当し、「大きな事故になる可能性」を否定する見解を堂々と述べる。原子力発電所の発電に使用されるウラン燃料の廃棄物(新しく生成される核種(プルトニウム、セシウム、ヨウ素、その他))の処理方法を人類はいまだ「発明」できていない。処理できない放射性廃棄物からも、原発事故でまき散らされた放射性物質と同じように、日々放射線が放出されている。「中間処理施設」及びその周辺は放射性物質で充たされ、放射線の脅威にさらされている。そうであるにもかかわらず、この危険性を除去する見通しが無いことを「原発利益共同体」の関係機関はほとんど触れることをしない、……これらの悪寒が走るような諸事実が基本的に解決されていないにもかかわらず、しかも福島原発事故の初歩的な段階に属す問題さえ処理できていないのに、電力会社・財界の期待を背負って登場した野田佳彦新首相は、「<停止中の>原子力発電の再稼働を2012年の夏までには実現したい」と吠え、「原発利益共同体」の期待にこたえている。事故発生から約6月の期間に、電力会社・政府・官僚・経済界・関係業界・マスコミ・学者は、懲りもせず、地域住民や国民の「普通に日常生活をおくることができる」ことの保障ではなく、自らの利益を引き続き確保するため「カネと権力」を総動員して、「原子力発電の再開」を声高に主張してきた。権力による押付けと策謀のもとで、カネの威力と権力に「妥協に妥協」して構築されてきた原発の歴史が凝縮された感さえある。

ほんの僅かに「脱原発」の方向を模索した菅直人は首相の座を追われ、野田新内閣で経済産業相に就任し「定期検査で停止中の原子力発電所の再稼働は、厳格な審査が必要」との考えを披瀝した鉢呂は、「失言」を口実に即更迭されている。圧倒的多数の国民は、カネと権力に屈する人々と、異なる立場にたち、脱原発社会を求めている。ドイツ、イタリア、スイスの脱原発に共感している。原発に依拠しなくても、原発の電力を補填する手立てはあり、電力不足によって日本社会が崩壊することはあり得ない。放射性物質に怯えて生活するよりは、多少の窮屈は我慢して暮らしてもいい。この流れが本流になりつつある。「カネと権力」に卑屈に、醜態にひれ伏すことを拒否し、「人の道」を歩きたい、という人々のうねりである。<カネと権力>と<人の道>の壮絶なバトルである。私は傍観者ではいられない。脱原発社会を願う人々とともにこれから「人の道」を歩いていきたいと思う。



韓国の図書館： 江原大学校中央図書館



経済学部 講師 田村 善弘

▼階段の下からみた図書館の全景



今回紹介するのは、江原大学校中央図書館です。

まず、江原大学校がある春川市について簡単に紹介しておきましょう。春川市はソウルから電車で1時間の距離にあります。夏は暑く、冬は非常に寒いところ です。

江原大学校は農学部、医学部、芸術学部、経営学部、人文学部、工学部、医学部などはじめとして18の学部からなる江原道を代表する国立大学です。留学生も世界各地から集まってきています。日本や中国は言うまでもありませんが、ロシアの極東地域の大学とも協定を結んでいることもあり、ロシアの方が多いのが印象的でした。

私は、2005年の3月から2006年の2月まで、交換留学生として留学していました。当時、私は大学院生だったので、図書館には資料収集などでお世話になっていました。大学には、中央図書館という大きな図書館があります(写真参照)。総合大学の図書館で、各学部での研究に関わる資料がいろいろありました。日本学科や日本留学経験のある教員が多いことから日本語の文献もかなりあります。

そこで目を引いたのが、2つあります。1つは、1990年代以前に書かれた韓国語の文献です。韓国語がわからない人からすれば、全部ハングルで書かれているので何が何だかわかりません。ですが、1990年代以前の文献は漢字が多いので、おおよその内容はなんとなくわかります。逆に漢字に慣れてい

ない韓国の若い世代の人からすると、難しいとか…。もう1つは、北朝鮮関連の資料です。初めてみる資料ばかりで、びっくりしました。ただ、それをすらすら読めるのかというと、南北での単語などの違いから、すらすらと読むことはできませんでした。

図書館内部は日本とあまり変わりませんが、コピー室がものすごく大きかったり、コピー料金が安かったり、ATMがあつたりと使い勝手がよかったのを感じています。

写真でおわかりのように、図書館の入り口に至るまでにはかなりの階段があります。夏は暑くて上るまでには汗だくになります。冬は雪で階段が真っ白になったり、寒さで凍ったりします。ただ、この階段は上る下りするという本来の役割に加えて、色々なことに使われています。付箋を使って様々なメッセージが作られたりと…。夜遅くまで可能ですので、資格試験や講義の課題をする学生が遅くまで図書館で勉強しています。韓国も就職事情は厳しいので、図書館で資格試験の勉強を行う学生がかなりいます。

通常は利用者数も適当な人数で、混んだけることは特にありません。しかし、例外があります。それは、大学の中間試験前と期末試験前です。コピー室も閲覧室も学生でびっしり埋まってしまいます。資料をコピーする際に、人が多すぎて結構待ったりしたことも多々ありました。試験前の図書館の慌しさ、これは日本も韓国も同じなのかもしれません。



▲ 図書館入口(写真の韓国語は「中央図書館」と書かれています)

倉本 聰 著

『獨白 2011年3月
「北の国から」ノーツ』

(342 頁)

(フラノ・クリエイティブ・シンジケート)



法学部 教授
樋口 徹

本書は、1980 年から放送が始まったテレビの連続ドラマ「北の国から」の脚本家である倉本聰氏がドラマ放送 30 周年を記念して、最初のシリーズ 24 話について富良野塾 OB ライターへの特別講義として 2011 年 2 月末から 4 月頭にかけて語ったものである。「北の国から」は、妻と離婚し子供 2 人を連れて東京から故郷の北海道・富良野へ戻った黒板五郎一家を描いた物語である。

私はこのドラマを以前テレビ放送で観たこともあったが、もっぱら最近購入した DVD で楽しんでいたところであった。本書を読む動機となったのは、ドラマの中で UFO 騒ぎの話が出てくるが、私としてはこのシリーズからして明らかに UFO の話は違和感があり、倉本氏がどういう意図をもっていたのか知りたかったからである。このことについて倉本氏は本書の中で、「大体科学万能というおかしな風潮が、子供の時代の空想力ってものを大きな壁で阻んでしまっている。その傾向は絶対にいけないよ。」と述べている。子供が得体の知れないものに興味をもち、自分なりの想像力をはたらかせる大事さをアピールしたかったのだそうだ。本書では今年 3 月 11 日の東日本大震災についても触れており、復興にあたってはドラマの主人公黒板五郎の生き方を参考にすべきであるとの主張を感じ取ることができる。

私としては、このドラマで時々使われていた「ヘナマズルイ」という北海道の方言が妙に気に入っている。



後藤 正治 著

『はたらく若者たち 1979～81』

(340 頁) (岩波現代文庫)



経済学部 講師
水野 有香

一昨年の春、私は本屋の「不安定労働」の特集コーナーでこの本に出会った。リーマンショック以降の世界的不況のなかで、非正規雇用の雇止め、ワーキング・プアの問題が社会問題化した頃のことである。

当時話題となった復刊本、小林多喜二の『蟹工船』と並んで陳列してあったこの本も、1983 年に出版された『はたらく若者たちの記録』（日本評論社）の復刊本である。

「かつての若者」のことを具体的に知りたくて、現場ルポルタージュのこの本を手にとった。フリーライターであった著者が、現場の労働者として働いたり、仕事後の飲み屋で酒を酌み交わしたりするなかで、その仕事と働く若者の意識を洞察するという内容である。それはまるでリアルな小説のようで、その世界に一気に引き込まれた。

読み終えてみると、不安定な仕事に就く、1980 年ごろ青壮年期を過ごした「かつての若者」と「いまの若者」にさほど違いはない。30 年前の現実が今の現実と見事に重なるのである。この本には、港湾労働者、長距離トラックの運転手、新幹線の保線下請労働者、システム・エンジニア、ディスクジョッキー、炭鉱労働者など、様々な仕事に就く若者が登場する。日本が高度経済成長を遂げ、多くの若者が正社員として安定した仕事に就くなかで、彼らは、それでもなお残る不安定でしんどい仕事を担ってきた。このような仕事は、脈々と現代まで続いており、その範囲は広がっている。そして彼らの思いもまた現代に受け継がれている。

この本に詰まっている古くて新しい「普通の人の普通以上の人生」から、何かを感じ取ってみてほしい。



読書ガイド

読書ガイドで紹介した本は図書館にあります。ぜひ一読ください。

岩崎 夏海 著

『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら』

(272 頁) (ダイヤモンド社)



経営学部 教授
高松 和宣

みなさんは、ドラッカーの『マネジメント』という書籍をご存じですか。この書籍は、1973 年にピーター・F・ドラッカーが著した「経営組織」に関するものです（上田 惇生訳『マネジメント - 基本と原則』）。私がこの書籍を初めて目にしたのは、大学（経営学部）のゼミの教員の研究室でした。

さて、今回紹介する本はベストセラーにもなり話題の本ですが、賛否はどうであれ、とても読みやすく数時間で読めます。この本のストーリーは 80 年代青春漫画の定型的展開の焼き直しです。読者によっては、単純でつまらない内容で期待はずれになるかも知れません。

しかし、マネジメントの内容に触れたいという程度、ビジネス書の入門書として、小説風に書いてあると思って読めば、良いと思います。文章も平易で、単純なお決まりのストーリーの部分部分にドラッカーの哲学を適用してゆく文書は、難なく読めるレベルです。

こうしたことからドラッカーの「マネジメント」の啓蒙本としては、十分に読むことをおすすめします。たとえば、マネージャーという言葉は、その意味において日本と欧米では異なり、それは役割や責任の考え方の違いからきています。それだけでも一読の価値はあります。

しかし、この本でマネジメントを理解することは到底無理ですので、興味がわいたら本物の『マネジメント』を読んでみることをお勧めします。なぜならば、著者が高校野球を題材にマネージャーの役割として「マネジメント」の視点を持ち込んだ様に、われわれ人間は何らかの組織に属して生きていることから、あるヒントになるかも。



レベッカ・クレーン 著 大野 裕 監修
家接 哲次 訳

『30 のキーポイントで学ぶ
マインドフルネス認知療法入門』

(168 頁) (創元社)



短期大学部 准教授
家接 哲次

現在、心理療法は数百もあると言われているが、近年それらに本当に効果があるかを検証する研究が盛んに行われるようになった。例えば、うつ病の患者を大量に募集して、抗うつ薬で治療する群と心理療法で治療する群にランダムに振り分け、治療効果を比較する無作為化比較試験 (RCT: Randomized Controlled Trial) が多く行われている。さらに、論文によって RCT の結果が異なったりするため、幾つかの研究結果を集約して、本当に効果があるのかを検証する研究 (メタ分析) も多く行われている。このような動きの中で、世界的に効果が認められてきているのは認知行動療法である。現在イギリスでは、うつ病などの精神疾患のために経済的損失が毎年 2 兆 5,000 億円もあるため、国が 363 億円を投入して認知行動療法ができるセラピストを 1 万人養成している。我が国でも、認知行動療法を医師が行うと保険請求ができるようになった (2010 年から)。ここ 2、30 年ほど心理療法の中で認知行動療法はほぼ一人勝ちしてきたが、最近になって次世代の心理療法の開発も進んでいる。その中で最も注目されているのが「マインドフルネス認知療法 (MBCT: Mindfulness-Based Cognitive Therapy)」である。精神的な問題を抱えた患者の否定的な考え方 (例:『私はダメな人間だ』) に対して、認知行動療法は適応的な考え方ができるように援助するが、マインドフルネス認知療法では、否定的な考え方を敵視するのではなく、むしろそれに囚われないように援助するのが特徴である。本書は、うつ病再発防止に関しての幾つかの RCT で、抗うつ薬よりも効果があることが実証された MBCT 入門書の訳本である。



沢木耕太郎 著『一号線を北上せよ ヴェトナム街道編』を読んで

経済学部 大澤 清

乗り合い

バスでデリーからロンドンまで走破した『深夜特急』の旅から30年。著者は南のホーチミンから北のハノイまで、「日本列島に置き換えると、本州の端から端、青森から下関くらいまで」の約1800キロを、途中下車を繰り返しながら、オープンツアーバスに乗ってひたすら北上します。著者の旅は又、近藤紘一（サンケイ新聞の元サイゴン特派員）、横木安良夫（カメラマン）、林芙美子（小説家）、ロバート・キャパ（戦場カメラマン）の跡を追う旅でもありました。

現代のベトナムは、1950～60年代の熱気に満ちていた日本を髣髴とさせます。道路に溢れるオートバイ・車の群れや、歩道に出された椅子、行商、露天商、手

作り内装の家、水田地帯の牛・アヒル。同時に急速な都市化の波も押し寄せています。

安土桃山から江戸時代にかけて、多くの日本人が東シナ海に乗り出して行きました。中部のホイアンには日本橋なる木造橋も現存していて、17世紀、この地に日本人町があつて商業地として繁栄していたことを偲ばせます。

南北に長く、面積は日本の約9割、人口は8800万人。しかも人口の6割が30歳以下で、教育水準も高く、顔形・性格や食文化も日本人に近いベトナム人。

「メコン経済圏」の一角、ベトナムを旅す

れば、必ずや著者の言うように、「ヴェトナムのエネルギーを注入され、新たな名の波動が生まれ」るはずで

す。（ベトナム検定3級）



◀ハノイの街角の光景

東野圭吾 著『新参者』を読んで

短期大学部 中島 梨紗

私は、東野圭吾の作品を好んでよく読みます。ミステリーという話が複雑で分かりにくいというイメージがありますが、東野圭吾の作品は違います。全体的に読みやすく、時が経つのを忘れてしまう程、本の世界に入ることができます。話が遠回りでも最後は事件の真相に行きつくというのが不思議で、私は、これはどこに繋がるのだろう、などと想像しながら読んで、楽しんでいます。

この話は、各短編ごとに主人公が変わり、事件に直接関係ない周辺人物の小さな謎を解いていくうちに、徐々に本来の事件解決が浮かび上がっていく構成となっています。その事件とは、日本橋小伝馬町で一人暮らしの四十代の女性が絞殺されたというもので、日

本橋署に着任したばかりの加賀恭一郎が事件を追ひ、未知の土地を歩き回る、というのが話の軸となっています。

この本を読んで、人と人との絆というのはすごいなと感じました。私は、改めて人との関わりを大切にしていきたいと思いました。人は一人で生きているわけではありません。家族や友人を始め、多くの人に支えられて生きています。常に人への感謝を忘れずに、また、自分も人に感謝してもらえるような人になりたいと思います。感謝してもらいたいから優しくするというのではなく、自分が今までもらったそれを人に返すことで、感謝の気持ちを表して生きていきたいです。



宇佐美百合子 著『幸せな私のはじめかた』を読んで

法学部 堀部 愛美亜

未来よりも大切な過去なんてないから、今この瞬間から幸せをはじめよう。この本は、幸福・自分・愛・勇気・人生についての30のメッセージが綴られています。誰しも、あの時あの言葉に励まされた、支えられたと感じたことがあるのではないのでしょうか。心に残る言葉は意識の転換を促し、また自分の中での力にも繋がります。

あなたは今、幸せですか？又あなたにとって幸せとは何ですか？

「一隅を照らす」これは、この本の中で私のお気に入りの言葉の一つです。一隅とは、片すみではなく“自分がいるところ”という意味です。「その状況において必要な光を発する人間になれ。その場において欠くことのできない存在になれ」と伝えています。自分がまわりを照らし、そこで役立つ人間になれば、

毎日身近にいる人たちと喜びを分かち合って生きていけるようになり、またそれこそが幸福の原点にも繋がるのだと思います。時間も心身も才能も、与えられているものは全て、まわりを照らすための光です。その光がいつそう明るさを増して輝くとき、幸福感に包まれるのだと思うのです。私にとってどんな時もかけがえないこの瞬間が、大きな宝物です。何気ない一瞬に輝く奇跡は、心で感じた大切なものや、思い描く夢、その影のたくさんの支え、“幸せ”を導いてくれます。わたしたちの心は、多くの出来事を感じられる魔法の宝箱のようなものだと思うのです。この本を読んで、大切なことを教わりました。



オグマン・ディーノ 著『十二番目の天使』を読んで

人間生活科学部 宮浦 郁奈

「絶対、絶対、あきらめるな」「毎日、毎日、あらゆる場面で、自分はどんどん良くなっている」この二つの言葉は、物語の中で十二番目の天使である、ティモシーが毎場面で口癖のように繰り返す言葉です。

この物語は、幸せの真っ直中の主人公が家族の死に叩きのめされ一度は自らの命を断とうとするが、親友の頼みをきっかけに人生を歩み直していく姿を描いています。頼み事とは、彼がコーチを務める少年野球のチームの監督になることでした。リーグの選抜テストで頑張る子ども達を見て、自分が少年時代にプレーしていた時のことを思い出し、少しずつ気力を取り戻していきます。こうして彼は「エンジェルス」というチームの監督となり「十二番目の天使」に出会うのです。ティモシーは、

助からない病気を抱えており、チームでも体は一番小さく、プレーも満足にできないものの、一番の頑張り屋で、試合の度に誰よりも大きな声で声援を送っていました。どんなに大きなミスをして、決してあきらめずに練習に打ち込み、毎日確実に上手くなっていると自分に言い聞かせるその強い精神に心を打たれました。

自分の人生の終わりを知った小さな子どもが、こんなにも一生懸命に一つの事をやり遂げ、私はどうだろう？と見つめ直しました。今では最高の仲間達と夢に向かい一生懸命ソフトボールをしています。一度きりの人生、自分の思う道をしっかり信じ、あきらめないという心を持ち、生きていきたいと思います。



お知らせ Information

Library News
What is done can't be undone.
Time flies
Library News
What is done can't be undone.

Our business in this world is not to succeed,
but to continue to fail in good spirits.

■絵本コーナーのご案内

一般書架に設置されていた絵本は4階新設“絵本コーナー”へ移動しました。

図書館には、国内外の絵本が、おおよそ1,000冊あります。開けると飛び出す絵本をはじめ、各国のめずらしい絵本、色も形もさまざまです。どうぞ4階“絵本コーナー”へ

絵本があなたを待っています。



■学生の皆さん!!

図書館を十分利用していますか。楽しんでいますか。1年生のみなさん、自分の求める本を探していますか。OPACでの検索でわからないことはありませんか。

卒論で頑張っているみなさん、図書館に求める資料がないからってあきらめないでください。他の大学図書館を利用するための紹介状の発行や、複写物・資料の取り寄せもできますよ。わからないことは、なんでもカウンターに聞いてくださいね。

■名経祭

今年の図書館のイベントは館員による“絵本の読み聞かせ”、教員バンド“B & E Plus”の演奏会、卒業生による“JAZZミニライブ”。

いずれも盛況でした。また、1階ホールでは、市邨幼稚園児の絵の作品展が開催されており、家族づれのお客様もたくさんお迎えする事ができました。そして両日にわたってバザー（リサイクル本等）も開き、収益金の一部を東日本大震災復興支援として寄付することもできました。

皆様ありがとうございました。



絵本の読み聞かせ



教員バンド“B & E Plus”



JAZZミニライブ



市邨幼稚園児の絵の作品展

図書館だより Vol.62 2011.11

発行所 名古屋経済大学 図書館
名古屋経済大学短期大学部

発行 年2回

印刷所 株式会社 一誠社 TEL (052) 851-1171

〒484-0000 愛知県犬山市樋池 61-22 TEL (0568) 67-3798 (代)

ホームページ <http://www.nagoya-ku.ac.jp/lib/index.html>